



マスター  
の間違い



川崎ゆきお

「間違いは誰にでもあるが……」

喫茶店のマスターが語り出した。聞いているのは常連客だ。

マスターはほぼ一人で店をやっている。昔は客も多かったのですが、この十年ほどは一人でさばける程度に減っている。一見さんが来なくなったからだ。

「マスターほどのベテランでも間違えることがあるのですか」毎朝出勤前にモーニングセットを食べに来ている青年が言う。この青年、もう中年近い年なのだが、マスターから見れば青年なのだ。そのためか、近頃の青年は、というとき、この客もぎりぎり青年に入っている。

「珈琲を出し間違えたよ」

「そうなんですか。それはよくあることじゃないのですか」

「いや、よくある間違いじゃない。二人の客が前後して入って来た。どちらも知っている人だがね、先に来た人はアイス珈琲しか注文しない客なので、聞く必要はない。次の一人は冬場はホット、夏場はアイスだが、冬場でもアイスの時もある。だから、一応毎回聞いている。しかし、冬場にアイスは、この客の場合トイチだ」

「トイチって、何です。利息ですか」

「十日に一度の割合だよ」

「ああなるほど」

「これは昨日のことなんだ。あなたが出てからしばらくして来る第二波の常連客でね」

「その時間、会社ですから」

「そうだね、顔を合わすことはないけど、まあ、同じうちの常連さんだよ」

「はい」

「その二人、同じ場所に座ることが多いんだよ。角の席でね。先に来た客が先に着く、どちらが先かはその日によって違うんだ」

「かち合うこともあるんでしょ」

「いやいや、一緒に入って来なければそんなことはない。席は他にも空いているのにね、やはりお気に入りの席があるんだろうねえ。そこでないと落ち着かないような」

「そうですねえ、僕もカウンターのこの席じゃないと落ち着きませんよ」

「この時間帯、ここは固定ですよ。あなたの座席指定席です」

他の常連客はテーブル席にいる。この時間、カウンター席にいるのはこの青年だけだ。

「それで、どう間違えたのですか」

「その二人ねえ。風貌が似ているのですよ。先に来た人はアイスしか飲まない人なので、アイスを作り、出した。そこへ二人目が来た。当然お気に入りの席が空いていないので横のテーブルに着いた。そして、注文を聞くとホットだった。昨日は寒かったからねえ。この冬一番の冷え込みだったらしい。だから聞かなくても分かるんだが、やはりホットだった。こんなときアイスだとトイチが狂うよね。どうみてもアイスだよ。十に一じゃなく、千に一の確立だよ」

「はい」

「それで、先の客のアイスを作り、二番目のホットの客に運んでしまったんだ」

「はあ」

「なぜこんな勘違いが起こったのだろうねえ」

「それでどうになりました」

「アイスをテーブルに置く直前に、気付いたよ」

「それは、うっかりでしたねえ」

「すぐに、いつものアイスの客に運んだが、皆から笑われたよ」

「まあ、そういう間違いは可笑しいですからねえ」

「私も笑いましたよ。照れ笑いですがね」

「そんなこと、普通によくあることじゃないのですか、マスター」

「注文を聞いて、それを忘れて、作らなかったことは結構あるけど」

「それは、本当に忘れて？」

「それはない。何か他のことで手順が違ったとき、たまにある。百に一度かね」

「ヒヤクイチですねえ」

「ない事はないが、それなりにある程度だよ」

「じゃ、出し間違えたのは、その前に何か手順が狂うようなことがあったとか」

「なかった」

「じゃ、もうそろそろお年ですから」

「そうだね。客もそう思っているよ」

「平和な間違いですよ」

「平和かい」

「はい。僕なんか、しょっちゅうミスや間違いをやらかしてますよ」

「私は完璧を期していたんだけどねえ。もう駄目だなあ」

「よくあることですよ。マスター」

「ぼけてきてるんだ」

「いいんじゃないですか。まだそのお年で店の切り盛りをやってるんですから」

「そうだね」

「多少間違っても」

「よくある間違いならいいんだけどね」

その後、このマスターは、その種の間違いが急速に増えたと言うことはなかったようだ。

了